

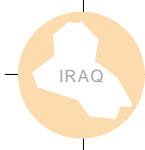
ユニセフ 子ども ネット ニュース

2003春 No.4

発行者

ユニセフ子どもネット事務局 財団法人 日本ユニセフ協会 広報室 〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
でんわ: 03-5789-2016 ファックス: 03-5789-2036 電子メール: jcuinfo@unicef.or.jp

ユニセフTOPICS



「平和こそユニセフの願い」 ～ユニセフ事務局長が声明～

戦争の緊張がたかまる中、キャロル・ベラミー・ユニセフ事務局長は「ユニセフは、現在の状況が戦争にならずに終わることを希望しています」と声明を発表しました。

ユニセフは1980年代初めからイラクで活動し、1991年の湾岸戦争の時やその後の復興を含め、現在も活動を続けています。しかし、平和を願うからといって、万が一のことを考えずに何も準備しないということではできません。ユニセフは、ほかの国際機関とともに、戦争が起きて、すぐに子どもたちに対する人道支援をおこなえるように備えました。

戦争が起きれば、さまざまな施設や道路が破壊され、予防接種のためのワクチンを運ぶこともむずかしくなります。予防接種を受けられない子どもが増えれば、せっかく根絶が間近になったポリオや、避難民



©UNICEF/HQ 032-0557/ Shehzad Noorani



©UNICEF/HQ 03-0006/ Shehzad Noorani/2002

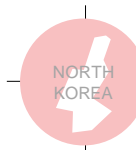
キャンプなどで子どもの命を奪うはしがが流行してしまうかもしれません。

そこで、ユニセフは2月から緊急のポリオとはしかの予防接種キャンペーンをはじめました。400万人以上の子どもにポリオの予防接種をおこなうために14000人の保健員が動員されました。保健員は一戸一戸を訪問して、すべての子どもが予防接種を受けられるように活動しました。すべては時間とのたたかいだったのです。

「イラクの子どもたちが非常に弱い立場にあることはまぎれもない事実です。事態がどのようなことになろうとも、イラクの子どもたちの健康と福祉が優先的に考えられるべきです」とベラミー事務局長は話します。

ユニセフは、イラク地域に何千トンもの支援物資をすでに運び入れています。これには医薬品や子どものための栄養補助食、水を供給する装置などが含まれています。

イラクの最新情報はホームページで。
<http://www.unicef.or.jp>



子どもの栄養状態についての 調査結果発表

朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)で、全国的な子どもの栄養状態についての調査結果が発表されました。この調査はユニセフとWFP(世界食糧計画)が政府と協力して昨年10月におこないました。

調査結果によると、最悪の食糧危機があった後、これまでの4年間に、北朝鮮の子どもの栄養不良の状態はかなり回復してきているということがわかりました。標準より体重が少ない子どもの割合は1998年の61%から2002年には21%まで減っています。また、非常に激しい栄養不良の状態の子どもも16%から9%に減っています。

しかし、減っているといっても、数にすればまだまだ多くの子どもたちが栄養不良である

養不良であることに変わりはありません。

ほかに、特に母親の栄養不良と貧血がひどいことがわかったと伝えられています。お母さんに栄養が足りないと、子どもに直接影響するので、深刻な問題です。

さらに、報告書は、この回復は国連などの人道支援に頼ったものであるため、もし、こうした支援が少なくなったり止まったりしたら、子どもたちの状況はすぐにまた悪くなってしまいうら、危機はまだ終わっていないのだ、と警告しています。



©UNICEF/HQ 97-0442/HORNER



©UNICEF/HQ 97-0443/HORNER

もっとも食糧危機の激しかった1997年の時の写真。その後子どもの状況は回復してきていますが...

史上最大の「学校へ戻ろう」キャンペーンはじまる

2003年はアンゴラにとって、とても大切な年になるでしょう。というのも、27年間つづいた内戦を乗り越えて、史上最大規模の「バック・トゥ・スクール(学校へ戻ろう)」キャンペーンがはじまったからです。

内戦によって、アンゴラ国内の学校もその他の施設もみな壊されてしまいました。学校が足りないこと、学用品が買えないこと、子どもが働かなければならないこと、出生登録書がないことなどの理由のために、アンゴラの子どもの44%は学校に通えませんでした。

ユニセフは、キャンペーンに備えて、アンゴラ政府と協力して、4000人の先生をあらたにトレーニングし、1300の教室を整備し、多くの教材を子どもや先生に届けました。そして、2月10日には、25万人の子どもたちが学校へ戻ることができたのです。

アンゴラ国内では、まだ300万人の人びとが避難生活をおくっています。子どもたちが学校に通えるようになることは、平和と復興への第一歩になります。今後、特に教育を受けられないことが多い女の子も学校に通えるようにすることなどを目標として、キャンペーンはさらに続けられる予定です。



©UNICEF Angola/MengaThomas/ February2003

STORY アンゴラ

背中には赤ちゃんをおぶって、両手にたくさんの教科書をかかえて、18歳のドロレス・ジャンバは、学校へ向かいます。今日からドロレスは先生です。彼女を50人の生徒が待っています。ドロレスは、新しい「バック・トゥ・スクール」キャンペーンにあわせて、トレーニングを受けた4000人の先生のひとりです。

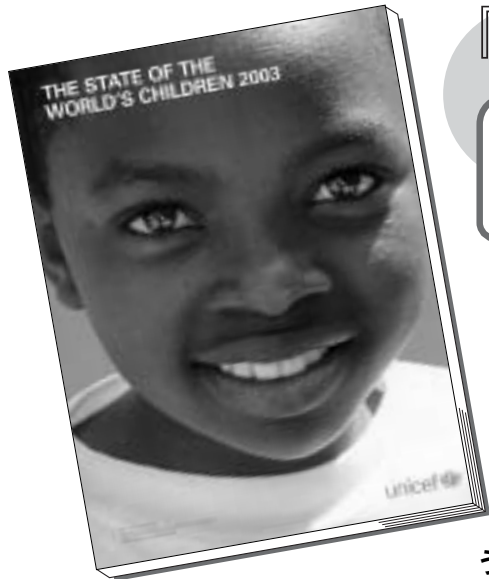
ドロレスが住んでいるのは州都キタから北へ30キロはなれたクンヒンガという町です。戦争のため、クンヒンガ全体でも、残っている学校は21校だけでした。でもユニセフの支援で1年のうちに41校のあたらしい学校ができました。町には市場もあり、学用品も売っていますが、多くの家族は学用品より食べ物をかうだけでせいじつはいいです。でも、今日は、子どもたちみんなに、学用品の入ったバッグが届けられました。中には、ノート、えんぴつ、消しゴムが入っています。

8歳のルシアナも学校に行くのは今日がはじめて。バッグをにぎりしめてみんなと先生を待っています。ドロレスの声がひびきました。「さあ、みんな、教室に入ってね」

今日からアンゴラの町のあちこちで、子どもたちが学校に通う姿が見られるようになるでしょう。当たり前の生活がもどってくることで、それが「平和」なのかもしれません。

もくじ

➤ ユニセフTOPICS	1
➤ 2003年世界子供白書発行「子ども参加」が大切!	2-3
➤ 地図で見える世界の子供たち「出生登録は生まれてすぐの子どもの権利」	4-5
➤ ユニセフ子どもワークショップ2003報告「子どもの人身売買」をなくしたい!	6-7
➤ REPORT&INFORMATION お知らせと報告	8



『2003年世界子供白書』が発行されました

「子ども参加」が大切!

でも、「子ども参加」って何だろう?



世界の子どもの状況を伝えるために、ユニセフは毎年「世界子供白書」を発行していますが、「2003年世界子供白書」は、少しよ

が、子どもならではのアイデアや意見が、おとなにも社会全体にもよい効果をあたえることが多くの場面で証明されています。

うすがちがっていました。テーマは「子ども参加」。全ページにわたって、どんなところでなぜ「子ども参加」が必要か、子どもをとりまく問題を解決するために「子ども参加」がどんなに力になるか、といったことが書かれていたのです。

それに、子どもが社会で積極的な役割をはたせることは、子どもの成長にもよいことです。みなさんも、自分の意見を聞いてもらえると、何だか自信がつくような気持ちになりますか? それに、社会の問題について知り、それらについて自分の意見を聞いてもらえる場があれば、そのことをよく考えるようになります。そんな経験をたくさんした子どもたちがおとなになれば、もっと民主主義的な社会が生まれ、さまざまな問題も解決されていくだろうとユニセフは考えているのです。

白書によると、「子ども参加」はさまざまなレベルで必要です。たとえば、家族の中でも、昨年「国連子ども特別総会」のような場でも、子どもの声がかかるようにしてはなりません。年齢も関係ありません。生まれたすぐあとから、子どもは自分にできる方法で、自分の思いを伝えようとしています。その声を聞けるようにおとなも努力しなければならないのです。

課題は、子どもが参加するかしないか、ではなく、「どのように」子どもが参加するかということに変化しつつあります。何千万人もの子どもたちが栄養不良や病気に苦しみ、搾取などの危険にさらされている今、よりよい子どもの「参加」が問題の解決に役立つことが期待されています。

もちろん、子どもは、おとなのように知識も経験も十分というわけにはいきません

世界中で「参加」しはじめた子どもたち!

地域の活動で活躍!

ナイジェリアのアピア州にある高校の「子どもの権利クラブ」のメンバーは、赤ちゃんの予防接種キャンペーンに大きな成功をもたらしました。キャンペーン中、メンバーは一軒一軒を訪問して予防接種の大切さを伝え、赤ちゃん一人一人を追跡して、予防接種を受けたかどうか確かめました。活動の結果、それまで予防接種を受ける赤ちゃんは月に8人ほどだったのが、今では月に300人をこえるようになりました。



©UNICEF/HQ01-0249/Justin Leighton

多くの国で子ども議会がひらかれています

タイの若者議会では、76県すべての学校から集まった200人の若者代表(障害のある子どもを含む)が、3日間、7つのテーマについて議論をし、その結果をタイの内閣の会で発表しました。そして、「子ども参加」が政府の政策として採用されました。

アルバニアでは、全土の80%におよぶ地域で、地域ごとの若者議会が開かれています。毎年、すべての地域の若者議会の全体会が首都ティラナで開かれ、そこでは、おとなの議会に対し子どもたちが心配していることが伝えられます。最近では、貴重な自然環境を残す湿地帯での原油調査に反対が唱えられました。



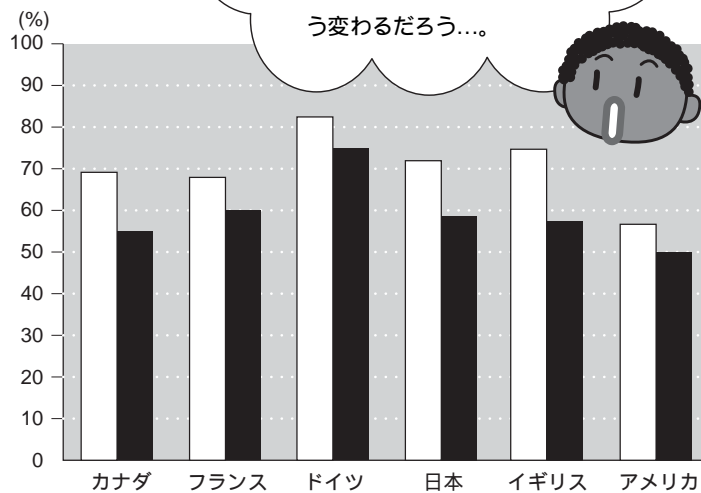
©UNICEF/HQ01-0251/Justin Leighton

おとなたちも努力しています

子どもにやさしい街づくりをして、子どもが参加しやすい環境をととのえようというとりくみがすすんでいます。インドのカルカッタでは、市の機関全体が協力して、働いている子どもや帰る家がない子どもなど、すべての子どもを調査して、学校に行っていない子どもを特定しました。学校が足りないこともわかり、市は700カ所に子ども教育センターをつくらうとしています。



©UNICEF India/DCD-0107



先進工業国での投票率(選挙に参加する人の割合)の変化
1945年～1990年の投票率の平均
もっとも最近の選挙の投票率

先進国では自分たちのことを決める政治に関心のない人がふえているみたい。子どものときから「参加」したり社会のことを考えていたらどう変わるだろう...

ユニセフ子どもネットワーク緊急大調査



伝えましょう! 子どもたちの声

さて、日本の子どもは、「子ども参加」をどう感じているのでしょうか。2月にお願ひした緊急大調査には、びっくりするほどたくさんのお返事があり、どんなにみなさんがいろいろなことを感じているのかがわかりました。中には、クラスメイトにアンケートをとってくれたネットワークもいました。全部を掲載できないのがとても残念ですが、集まった声をできるだけご紹介します。

質問 1

**「子ども参加」ときいて、
どんなことをイメージしますか？**



子どもが意見を伝える場に参加し、おとなと一緒に考えたり、おとなに自分達のことを伝えるとか、同じ子どもなのにぜんぜんかんきょうの違う思われていない子どものえんじょに子どもが参加することとか。

川崎 真奈(11歳)

いいと思います。でも何をやるのか何をしたらいいかわからないです。それに参加してどのようなことを助けられるのかもわかりません。

夢沼 恵(13歳)

とてもいいイメージがあります。紛争などの話し合いなどにはおとなしか参加していないけれど、世界にはおとなだけがいるのではなく、子どももたくさんいるのだから、子ども参加は絶対に必要だと思います。

岩下 哲也(15歳)

ユニセフ子どもネットをイメージします。子どもネットで活動していると、自分も地球の一員だということをすごく実感するし、私たち(子ども)が「世界の協力」に参加していかなければいけないと私に教えてくれたからです。

中佐 友衣(15歳)

以前まで、「子ども参加」と聞いてイメージするものはいろいろな活動に積極的に参加する、体を動かし、何か少しでも社会に貢献することであると思っていました。しかし最近ではそれだけではないと思い始めてきました。私たち子ども一人ひとりが今ある社会問題を理解し、それについて考え、自分の意見を持つこともひとつの「子ども参加」と考えます。

寺田 真里子(16歳)

はっきり言って、あまりイメージができません。なぜなら、地域の活動から、世界の大きな活動まで、子どもが参加できる場というのが極端に少ないからです。

山神 啓明(16歳)

現在のイメージとしては、「子ども参加」というスローガンだけで、ただ、子どもも参加しているが、実際はおとなの思うままに動かされているというように思える。

大矢 哲(17歳)

質問 2

**自分の意見を聞いてほしいなと感じたり、
子どもに参加させてくれるといいのにと
思ったことがありますか？ それはどんなことでしたか？**

あります。国会に子どもの代表やいろいろな世代の人を入れれば、すぐに今話し合っていることをどう思っているのか、きけるからいいと思います。

本田 瑞貴(10歳)

選挙。子どもだってその地域にいるんだからみんなの意見とは言わないけれど、少しは子どもの考える行政？ みたいなものもいじらなければいけないかな？

志藤 麗(11歳)

がっこうあつたベルマークの使い方。学校でボランティアというわりに、自分の都合でものを買っている。よく考えて使ってほしいと作文に書いた。けれど400人くらいの学校なのに、ボールを90個も買った。神戸の女の子達は、アフガニスタンへボールを送ったのに...悲しかった。

大矢 格(12歳)

以前、歴史の教科書が問題になって おとなの間では、毎日議論がなされていたけれど、その時に「子どもの意見も聞けばいいのに」と思った。教科書を使う当事者の子どもが参加していないのは、おかしいと思った。

上野 結(15歳)

がっこう中を禁煙にしてほしいと思い、先生に頼んだが、断られたこと。がっこうは子どもの生活する場所だから、生徒も集まって会議などをやってほしい。

後藤田 遥(15歳)

くにどうし、問題で、子どもが出る幕ではないと言われる難しい問題でも、おたがいの国の子どもたちが、どんなことを考えているのか気になる。「おとなが決めることだから子どもたちには関係ない」という考えではなく、ぜひ子どもたちも、その問題が解決できるように手助けしてほしいと思った。たとえば、戦争を始めるかどうかを話し合う会議の傍聴に参加し、子ども達の気持ちも無視せずに物事を決めてもらえるように、同じ地球人として存在をアピールする。

高橋 ありさ(15歳)

時々授業の構成がすごく嫌になってしまうことがあります。「こう変えたらもっと楽しい分かりやすい授業になるのではないか」、授業以外でも「この制度をこう変えたら生活しやすいのではないか」と考えた時に、それを先生に伝えられるちょうどいい場所がほとんどないことを残念に思います。

藤田 温乃(15歳)

自分の意見を聞いてほしいと思ったのは、ブッシュ大統領が戦争を強調していた時です。大統領は相手の国のためだという趣旨の発言をしていたようですが、戦争をしたら子どもを含めた多くの市民が傷つくことは、私たち子どもでもわかります。だから、子どもの声も聞いて冷静に判断してほしいと思いました。

奈良 明子(17歳)

質問 3

**何かをよくするためのことや、自分の意見を伝えるようなことに参加したことがあれば、
その時の経験や感じたことを教えてください**

がっこうで地球を元気にすることをやっていると、リサイクルのことを発表しました。その時は、おとなもきていて、子どもの意見でも正しいければ、おとなもきくと聞いてくれるのだな、と思いました。

丸山 綾子(9歳)

1年生の時に、学校であさがおの種がいっぱい取れたので、どうするかと話し合いになりました。

私は学校の近くにおとしよりの施設があるので、一人暮らしのおとしよりにあけてはどうかと発表しました。いろいろな意見が出た中で、担任の先生が私の意見に賛成してくれて、クラス全員であさがおの種を持っていくことになりました。おとしよりは涙を流して喜んでくれて、よかったなあと思いました。次の年の1年生から毎年1年生があさがおの種をおとしよりにあげています。私の意見で今も続いていいると思うと、とてもうれしく思います。

宇津木 亜衣(10歳)

インドで地震が起きた時、ユニセフに募金をした。その時、自分のお金が外国の人の役に立っているのだと思い、世界のつながりを感じた。

今関 美都(12歳)

市の国際交流センターの「交流祭り」に参加した時、日本ユニセフ協会の宮城県支部の人が励ましてくれて、おとなが自分の考えを理解して協力してくれたことに感激を覚えた。センターの方も(自分を)他のNGOの方と同じに扱ってくれたのでうれしかった。

中村 翔也(12歳)

区主催の「子どもフォーラム」(区の小学校の代表者が区役所に集まり、これからの区をどうするかについて話し合う)に参加したが、司会がおとなだったのでおとなの思い通りに進められるような気がした。かたたくしく、あまり良い印象をもてなかった。

三木 綾子(12歳)

「ユニセフ子どもセミナー2002」でみんなの意見や自分の意見を紙に書いた時に、みんながぼくの意見にうなずいてくれてうれしかった。また、みんなの意見を聞いて、みんなも一生懸命だなどということを感じました。

渡辺 濯(13歳)

役員会の選挙の時。自分はこんな理由で立候補したということをみんなに伝えた。選挙が嫌で、立候補するが迷ってたけど、思い切ってやってみた。自分が思っていることを他人に伝えることで、自分の中でも整理ができ、とても充実感を感じた。

E.A.(14歳)

小6の時、子ども国会に参加しました。スケジュールとか発言者とか決められたのは、おとなでした。(発言者はあらかじめ質問を提出しておいて、そこから選びます)自由な意見とか、会議の進行中に考えついたこととか発言できなくて残念でした。

大矢 透(14歳)

去年の秋、3連休を利用して「ブンとミーチャの物語」原画展をひらきました。子ども買春を来ていただいた方に理解していただくことはとても大変だと気がされました。「これで一体何を伝えたいの」という強気な意見もあり、「こういう現状を知ってもらいたい」と答えるほかなかった。今は...の活動を進めている」などと言いたかったです。

N. 啓子(15歳)

年に3回の生徒相談会のようなもので、これからの生徒会活動について意見を述べる場があったのですが、なかなか回りで手を上げる子が少なく、私も手を上げられませんでした。ですから、自分の意見を伝えるようなことに参加したことはない気がします。

山口 梢(15歳)

中学校では何でも生徒達で提案し、アンケートをとり、決定していた。心の面で成長できたと思し、その難しさも知った。高校に入学して、一方的に校則を押し付けられ、常に教師と生徒間で対立が起きているのを見ると、なんとも言えなくなる。私が個人的に生活指導の先生に意見を出したら「それはこの高校の代々の伝統だからしょうがない」と言われた。(ちなみにその伝統は県民の日11月半ばまで体育は半そで短パンというもの)おとなは楽なほうを考えると、実際に身をもって感じている子どもの意見を聞いてほしい。

石川 未季(17歳)

質問 4
**みなさんが考える理想的な「子ども参加」とは
どんなものが教えてください**

「おとなが子どもの意見を聞いてくれて、それによって世界が動く」というのが理想的な「子ども参加」だと思います。未来は私たち子どもが主役だから。

杉浦 綾子(12歳)

これからの日本は子どもが中心となって動いていくのだから戦争や核兵器の問題などはごく一部の人達が考え、実行するだけではなく、子どもの意見を聞いてくれて、国会などにも子どもを参加させてくれたらいいなあと思います。

鈴木 彩子(12歳)

子どもにも発言させてほしい。たとえば国会とか市議会とか、県議会とか。まっ、とにかく子どもにも意見をさせて!そして行動させてください!という感じです。おとなも子どもも関係なく意見が言えるようになってくれたらいいなあ(理想的や!)と思います。

澤田 玲奈(13歳)

発言、行動に制限がなく、自由でのびのびした環境を作り出すことが「子ども参加」の第一歩なのではないでしょうか?伝えたいことがあっても「周りから変に見られるからやだ」などと思って伝えなくて終わってしまうこともあります。それに伝えたとしても、否定されてしまったり、聞き入れてもらえなかったりすると、不安になってしまうこともあるので、あたたかい環境が必要だと思います。

森田 江璃子(13歳)

子どもには感じていることが本当はたくさんあるけれど、それを言葉にできず、心の中にとまっている思いがたくさんあると思います。たとえば、発言する場を作ってあげたり、その意見について一緒に考えてあげたり...など方法はいろいろあると思います。

崎田 ゆかり(14歳)

幸せに暮らしている子どもこそ、大変な生活を送っている子ども達のために、学校・地域・国から支援していければいいと思います。小さなことでも参加して、世界の状況に目を向けて生きていくことも参加することだと思います。

中澤 真由美(15歳)

国連子ども特別総会では、本当に困っている国や地域の子ども達が「子ども参加」できたのでしょうか?世界には、学校にいけない子どもが1億人以上います。私たちが知らないだけであっても、世界の国々には自分の意見を言いたくても言えない子ども達が大勢いると思います。将来、過酷な生活の中で、暮らしている子ども達ももっと参加できるように、意見を述べられるようになったらいいと思います。

木谷 恵子(16歳)



地図で見る世界の子どもたちのようす

出生登録は生まれてすぐの子どもの権利!

みなさんは、生まれてすぐに自分の出生届が役所に出されたことを知っていますか？ いつ生まれたか、両親はだれで、男の子か女の子か、なんという名前か…。こうしたことを登録してはじめて、みなさんの存在がちゃんと認められます。

そして、登録されてからは、決められたときに健康診断や予防接種のお知らせが届き、学校に行く年齢になれば近くの小学校に入る手続きをするようにお手紙が来ます。

もし、この届が出されていなかったらどうでしょう。みなさんは、公式にはこの世界には存在しないのです。予防接種のお知らせも、学校に入る通知も来ません。その子の名前はだれにも認められていません。国籍もないことになってしまいます。おとなになっても、結婚したり、銀行の口座をつくらたりできません。選挙にも参加できません。

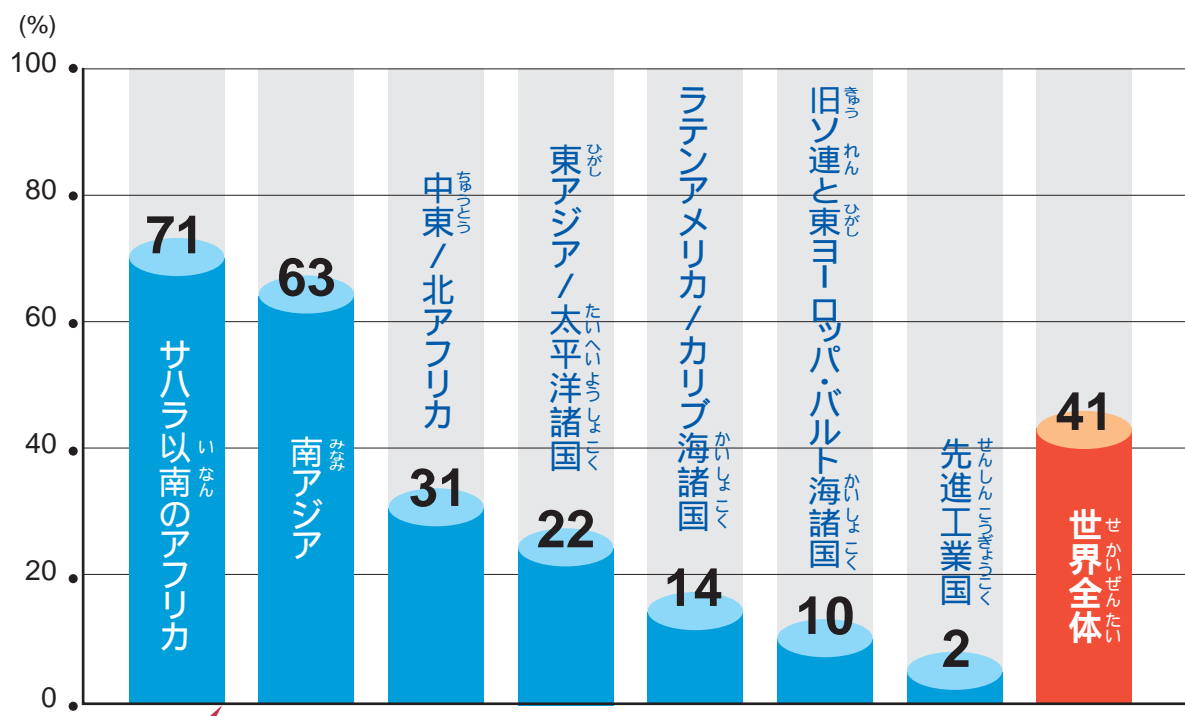
世界中で2000年に生まれた子どもの41%、なんと5000万人以上がこうした登録をされずにいます。その結果、予防接種などの保健サービスを受けたり、学校に通ったりすることがむずかしくなっています。

出生登録こそが、教育や健康の権利、名前や家族の権利、搾取や虐待から守られる権利を保障するための、第一歩なのです。



出生登録を受けられない子どもは？

都市部より農村部の子どもの方が登録を受けられないことが多く、両親が読み書きできないとその子どもも登録されにくくなります。また、戦争などのために孤児になったり、家族と別れてしまった子どもも登録を受けにくくなります。難民や避難の子どもは、もっとも登録がむずかしいとされています。



登録されていない赤ちゃんの地域別の割合(2000年)

(出典: UNICEF, 2001)



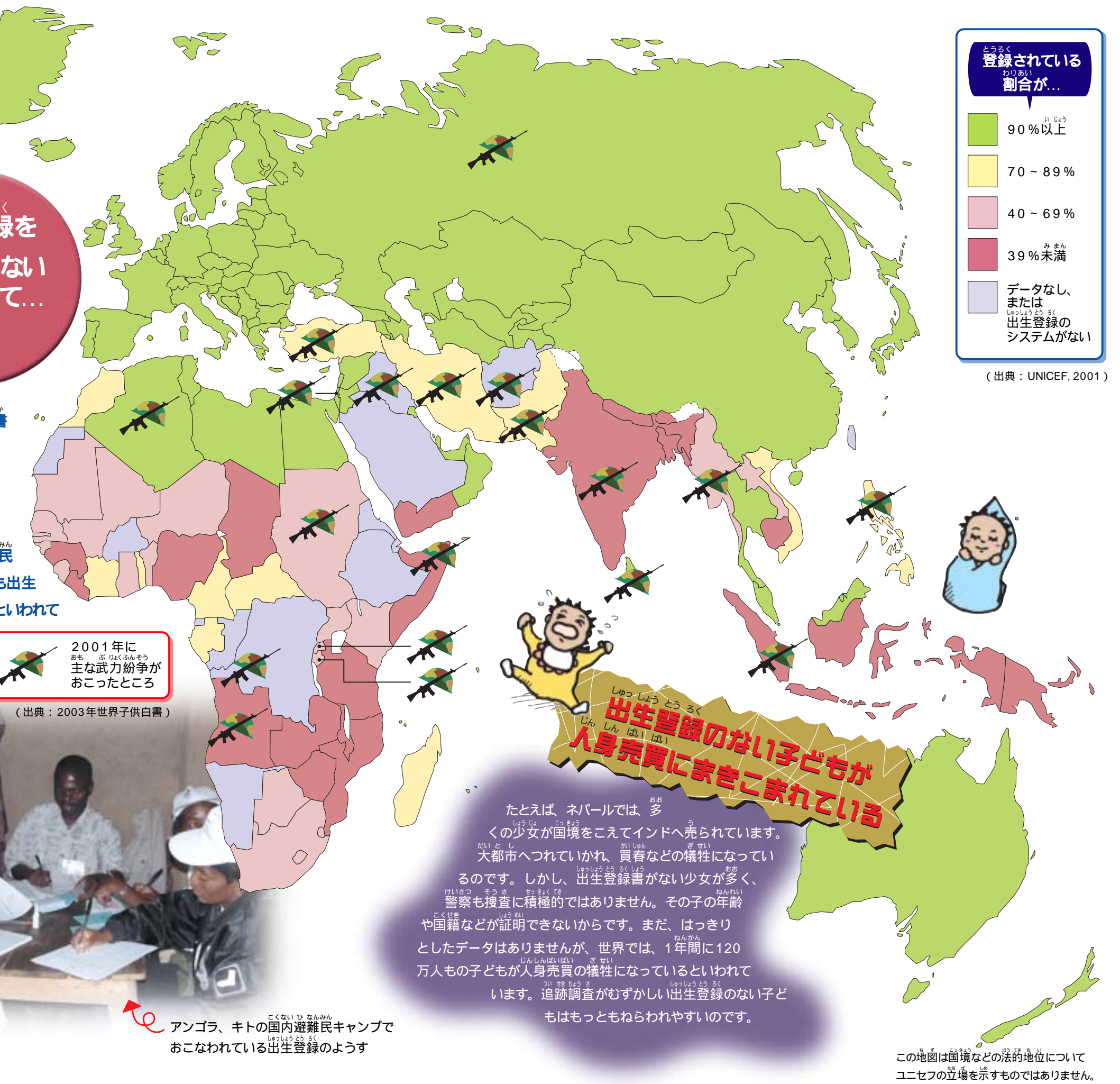
わたしたちはここにいます!

マリアとヨネアレンが登録されるまで [ベネズエラ]



ストーリー STORY

あか しまつしやうとうろく わりあい ねん まれた赤ちゃんが出生登録されている割合(2000年)



ア・ジョセフィーナ・ベオモンは、26歳のおかあさん。歳9ヶ月になった娘のヨネアレンがそばで楽しそうな声をあげています。でも、この2人の名前は、政府や役人の記録にものっていません。

アは生まれたときに、出生登録を受けられませんでした。だから、娘のヨネアレンも登録することができなかったのです。

「もし子どもが病気になるっても、病院ではみしてくれません。だって、わたしがこの子の母親だとは証明できないのですもの。手術が必要になっても、わたしにはそれを認めるサインをすることもできないのです。とてもおそろしいです」とマリアは話します。

でも、登録をしようと思っても、それはマリアやヨネアレンにはとてもむずかしいことです。なぜなら、車で20時間もかかる街の裁判所まで行かなければならぬうえに、その作業は時間もお金もかかるからです。

ベネズエラには2500万人の人が住んでいて、そのうちの半分が18歳未満の子どもです。ユニセフは、そのうち100万人以上が出生登録されていないと考えています。

ある日、マリアの住むところで新しいシステムがはじまりました。デフェンソリアとよばれる施設がオー



ブンし、そこでは、出生登録から生活保護のお金を使い込んでしまう父親の対処まで、簡易裁判所のようなことをしてくれます。そして、すべて無料なのです。今では、ベネズエラ全体で、175ヶ所以上のデフェンソリアがオープンしました。毎日50件もの依頼が入るところもあります。子どもの権利を守るための地域の中心になっているのです。

無事に登録がすんだマリアとヨネアレン。いつもと同じようにヨネアレンは笑い声をあげています。これからは何かを心配しつづけてなくてもいいし、みんなが自分を認めてくれる。そう思うと、今日は、マリアもヨネアレンといっしょに心から笑えるような気持ちになりました。



最初にみんなでゲームをしながらリラックスしてなかよくになりました。

ユニセフ子どもワークショップ2003

子どもの 人身売買 をなくしたい!



©UNICEF/HQ00-0983/Achinto

「子どもの人身売買」なんて聞いたことがない、という人も多いかもしれません。子どもがモノのように売り買いされるなんて、どこか別の世界の話のような気がするかもしれません。でも、世界には家族とはなれて働きに出たり、モノのように売り買いされている子どもたちがいるのは本当のことです。

2月22日に開かれた「ユニセフ子どもワークショップ2003」では、どうしてそんなことがおきるんだろう、それをなくすためにはどんなことができるんだろう、そんな疑問をみんなでぶつけあってみました。午後には、アジア7カ国で活躍するNGOのスタッフやユニセフの現地職員17人が参加して、さまざまな話を聞きました。

「子ども活動プランナー」に応募してくれたネットワーク6人からの報告です。

午前のプログラム

「ブンとミーチャのものがたり」のビデオを見た後、7つのグループに分かれて、q 悲しかったこと w 嫌なこと e 良かったこと r 変わってほしいこと t 自分たちにできること、について話し合いました。

私のグループでは次のような意見が出ました。

- q ・おとなの利益のために子どもを売り、物のように扱うこと
 - ・人身売買がいろいろあるところまで起っていて、またその現状を知らないこと
 - w ・おとなの勝手手で子どもをあつかうこと、
 - ・おとなが子どもに暴力をふるったり、だましたりすること
 - e ・希望を捨てずに、おたがいに支え合える友達がいたこと
 - ・つらい経験を話すことで、多くの人が現状を知ることができたこと
 - r ・教育を受けるなどして、人身売買の現状について知ってほしい
 - ・子どもを勝手に売らない
 - t ・おとなも正しい情報を知らないから、多くの人に伝えたり教えたりしてほしい
 - ・ユニセフなどに協力してもらって、子どもを保護する施設を建てたり、薬を提供したりする
- 発表のときには、模造紙に絵を書いてカラフルに仕上げたり、人形劇のようなかたちで発表したり、各グループで工夫しました。(内田 沙希 16歳)

門 一番が居眠りをしていなかったらブンとミーチャはどうなっていたんだろう、どんなひどい状態でも学校のことを知っていて、エイズのことを知っていたらどうなっていたらどうか？ブンが自分の体験したことを村の人たちへ話してくれてよかった、などの意見が出ました。ほとんどの班では意見を物語の流れ通りに置きかえて整理しました。代表的な意見は、好き勝手するおとながいなければミーチャが死ぬことはなかったというものでした。(丸竹 拓也 13歳)

いち 一番多かった意見は、おとなが子どもを勝手に売ってしまうのはいけない、ということでした。この物語を見て「よかったところはどこ？」と聞かれ、みんなの答えは一つになりました。それは友達と助け合い、夢をあきらめず支え合ったことでした。親は自分の子どもを売った後に、その子が暴力を受けて苦しんでいることを知らずにいる。そんなおとなは許せないと思いました。(マーシー・ローズリン・萌実 13歳)



グループでの話し合いをみんなに発表しました。

私のグループで出た意見は、次のようなものでした。人身売買をする悪いおとなは、自分の利益しか考えていない。子どもの権利を無視し、平気で子どもを物のように扱うことができる。私達にできることとして、人身売買という現状をなるべくたくさんの人に知ってもらい、人身売買から子どもを守ることができる良いおとなになってもらうこと。今の自分達の環境を当たり前のこととしてとらえないこと。人を思いやる心を忘れないこと。また、人身売買の被害にあわないために、正しい教育や情報を得られる環境が必要だ、などなど。悪いおとなだって幼い時はきっと純粋な心を持っていたと思います。心のどこかにまだ残っているはずの純粋な部分を表に引き出せればいいのかなあと思いました。(須賀 知佐子 13歳)



ブンとミーチャのビデオを見た後のグループごとの話し合いの様子



子どもの権利を買わないで 『ブンとミーチャのものがたり』 あらすじ

ブンは、南の国の小さな村に住む12歳の女の子。お金はないけれど、みんなできよく暮らしていました。ある日、村にテレビという名の箱がやってきました。みんな不思議な箱におおさわぎ。持ってきた男が、ブンのおとうさんにささやきます。「ブンを都会に働きに行かせなよ。子守りの仕事さ。それでこの箱の代金になるよ」 都会へのおさがれもあり、弟や妹もよろこばせたかったブンは、働きに行くことと答えました。

でも、ブンの連れていかれたところは、洋服工場。毎日朝から晩まで休みもなく、食事も十分与えられず、つらい仕事をさせられます。なぐられたりもします。そんなとき、工場の見はりの男がブンに話しかけます。「もっとかせぎのいい仕事があるんだ。紹介してやってもいいよ」 ブンは男を信用しました。1日でも早く家に帰りたいのでした。でも、連れていかれたところは薄暗い軒屋。閉じこめられ、ブンは毎日、何人もの男に乱暴されるようになってしまったのです。



毎日泣いていたブんに、同じところではたらかされていたミーチャという友達ができました。ブンとミーチャはおたがいに助けあうようになり、施設に保護されます。でも、ミーチャはすでにエイズにかかっている、「いっしょに学校に行きたかった」という言葉を残して亡くなってしまいます。ブンは、今では、施設に逃げた女の子の世話をし、ブンやミーチャのような少女がうまれぬように、山の村をまわって話を続けています。

三 ミーチャがエイズになって、死んでしまうという悲しい場面を見て、涙をこらえるのが精一杯でした。ミーチャのようにエイズに感染し、死んでしまった罪のない子どもがこの世界に何人いるのでしょうか。可哀想で可哀想で胸がしめつけられる思いです。わたしは無理に働かされることもなく、学校にも行けて、おいしくて栄養のあるご飯を毎日食べられる、それが普通だと思っていました。世界にはブンやミーチャのような子どもがたくさんいて毎日死ととなり合わせて暮らしているのです。そのことを忘れないで生きていきたいと思いました。(榎谷 芽里 14歳)

「ブンとミーチャのものがたり」を見て上のq ~ t についてまとめた結果、人身売買で子どもを「モノ」のように扱うおとな達は子どもの人権を無視しているし、そういった勝手なおとながたくさんいることは問題である。傷ついた子どもを保護する施設があつてよかった。思いやりのある心の存在は大切である。人身売買の恐ろしさをみんなに伝えさせる教育が重要で、私達はこういった事実から知っていくべきであるなどの意見から、q 「子どもの権利無視」w 「勝手なおとな」e 「心と心」r 「教育」 t 「知ることからはじめよう」というキーワードにまとめた。(藤田 温乃 15歳)

午後のプログラム

アジア7カ国(タイ、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、ラオス、バングラデシュ)から来日していた子どもの人身売買を防止する活動をしているNGOのスタッフやユニセフの現地職員から、グループごとに話を聞きました。

カンボジア・グループ Cambodia

「OUR HOME (私たちの家)」というNGOで活動しているハン・ピボルさんの話を聞きました。カンボジアではストリートチルドレンの数が1万人を超え、問題が深刻になっています。そこでストリートチルドレンの保護のためのセンターがつけられ、昼間子どもたちが過ごせるようになっているそうです。保護された子どもの中には体を売って生活してきた子どもがたくさんいます。

ある男の子の話です。お母さんは離婚し、新しいお父さんが一緒に暮らすことになりました。新しいお父さんはよく暴力をふるい、男の子は家にいられなくなってしまいました。男の子は街でいろいろなことをして働きます。夜は体を売ります。そのうち、男の子のお母さんも、彼が働くお金で生活するようになりました。お金が無くなると、お母さんは子どもの体調を気にせず、背中をポンと押して、また働きに行かせます。お金がない日は、ホテルのゴミ箱で食べ残しを拾って食べます。それが続くと、お母さんは自分の子どもを売って、そのお金で食べ物を買っているそうです。今、この男の子はセンターに保護されています。センターでは、美容師になるためのことなどが教えられています。

お金を手に入れるために体を売ることしかできないのでしょうか、とたずねてみると、「他にも靴みがきや車をあらうなどの仕事がある。でも一番手取り早くお金が入るのが体を売ること。1回で5ドル~20ドルになる。(およそ600円~2400円、カンボジアでは1日3食、1週間は食べることができる金額)」と教えてくれました。生き抜くには、自分の体を売るという選択をばざるを得ないという現実がたしかにあります。

(マーシー・ローズリン・萌実、神谷 芽里、藤田 温乃)



バングラデシュ・グループ Bangladesh

バングラデシュのミザヌー・ラーマンさんが来てくれました。ラーマンさんは25年前に活動をはじめました。バングラデシュでは、年間1万人から2万人もの子どもや女性がいるんな商品や食べ物などに誘惑されて、人身売買の犠牲になっているそうです。人身売買される子どもの主な利用方法は、ラクダレース、性的対象、目・頭蓋骨・心臓などの臓器を取って売る、など。売られていく場所は主に中東だそうです。また親せきの間でも人身売買がおこなわれているそうです。

ラーマンさんが活動をはじめたころに比べて人身売買は減ってきているそうですが、犯罪組織化されてきているそうです。きびしい法律があるそうですが、人身売買をしている人たちは、道徳心がなく、ずるがしこいのでなかなか取りしめることができないそうです。また団体に脅迫電話がかかってくることもあるそうです。ラーマンさんの団体が助けている子どもの数は年間約400人だそうです。売買されている子どもや女性の数、1万や2万にはまだ遠くおよびません。

(丸竹 拓也、須賀 知佐子)



各国で活動するNGOやユニセフのスタッフから話を聞く参加者たち。リラックスしているような質問をすることができました。

フィリピン・グループ Philippines

ユニセフのヴィクトリア・ジュアットさんと、NGOのドロレス・アルフォルテさんからお話を聞きました。フィリピンは、島が集まってできている国で、島と島の間で人身売買がおこなわれているそうです。ひとつの家庭に4~6人の子どもの子がいて、生活が大変で、小学校さえ卒業できない子もいます。ストリートチルドレンが多く、物ごいをして生活しています。お腹がすくのをもぎらわすために麻薬を使っていることもあるそうです。そのためマフィアによって管理され、パーなどで働かされることもあるそうです。

一番衝撃を受けたのは、ドロレスさんの経験談です。1993年に東京を訪れたドロレスさんが、調査のために日本のポルノ雑誌を買ったら、そこに7~9歳、11~15歳くらいと思われるフィリピンの子どもが裸のままうつっていました。雑誌を持って帰り子どもたちをさがしたところ、首都マニラの貧しい人びとが暮らす場所にいるのを見つけたそうです。子どもたちに話を聞くと、フィリピンのさまざまな地域や島からここに連れて来られ、日本人に管理されているというのです! なかにはマニラで過ごした後、日本に連れて行かれる子どももいるといひます。現在フィリピン政府に捕まっている日本人もいるらしく、話を聞いているだけでも、同じ日本人としても恥ずかしかったです。

(内田 沙希)

いくつか質問も出ました。

Q. 人身売買の原因でもある貧富の格差の原因は何ですか?

A. 人口の40%以上が貧困層の暮らしをしています。原因にはフィリピンがにほかの国によって支配されてきた歴史があげられます。300年前にはスペインの植民地で、その後アメリカや日本にも支配され、独裁政権(マルコス政権)が20年続きました。

Q. 日本の援助交際についてどう思いますか?

A. 日本の子どもとフィリピンの子どもの環境が違います。自ら進んでそんなことをやることはフィリピンではありません。

Q. 私たちに何ができますか?

A. 世界中でこれだけ人身売買が起きていることを話し、子ども買春は犯罪だと教えてほしいです。お金を出さず断ることができません。だから、お金はほかのことに使ってほしいです。ぜひみなさんも一度フィリピンに来て、現実を知り生活を体験してください。そして、犯罪をしなくても十分に楽しい国だと伝えてほしいです。



各グループごとに、聞いたお話をもとに、人身売買のさまざまな場面を再現しました。各国の状況などが、それぞれ特徴のある発表で報告されました。

その他のグループで話されたこと

ミャンマー・グループ Myanmar

1990年代に働き先を求めて、多くの子どもがタイや中国に出ていった。1999年の調査の結果、そうした子どもたちが人身売買、児童労働、麻薬、エイズなどの問題に直面していることがわかった。タイなどでは、働かせるために子どもに麻薬を飲ませていることさえある。麻薬を飲むと、気分がたかまって、よく働くようになる。けれど、麻薬中毒になってしまう。ミャンマーには、人身売買を防ぐための政府の委員会や警察があるが、女の子たちは表ざたになることをいやがって、あまりうったえたりしない。

ラオス・グループ Laos

ラオスでは、6月から12月の雨季の間、多くの若者がタイへ出稼ぎに行く。はじめは、ウェイトレスになったり、工場で働いたりするが、性産業に巻き込まれる人も出てくる。子どもの人身売買には、仲介者がいて、時には警察が手を組んでいることもある。一番の予防方法は、生活能力を高め、知識を持つこと。他に現金収入を増やすためのプログラムなどがおこなわれている。

タイ・グループ Thailand

子どもを扱うおとなは、タイ人だけでなく、外国人もいる。子どもは監禁され、逃げればひどい罰を受ける。長期的なケアができる保護施設などは不足している。人身売買を禁止する法律もあるが、警察はあまりきびしく取りしまろうとはしていない。タイ国内での人身売買は減っていても、まわりの貧しい国から少し豊かなタイへ人が流れてくるので、人身売買の件数は増えている。防止がもっとも大切。そして、救出し、保護すること。もし自分の身に起こったら何をしてほしいか、それを考えればすべきことがわかるはず。

ベトナム・グループ Vietnam

ベトナムでは、1979年に社会の刷新政策「ドイ・モイ」がはじまった。これにより、経済にも資本主義的な仕組みが取り入れられ、人びとの生活も豊かになったが、人身売買の問題が起ころはじめたのはドイ・モイがはじまってからである。ベトナムには、50以上の民族が暮らしていて、経済的に貧しい少数民族が人身売買に利用されやすい。最近では政府の防止キャンペーンの情報が伝わるようになってきたが、まだ増加の傾向にある。防止に協力することが最初にやらなければならないことである。

ワークショップで感じたこと

私はこのワークショップで日本人がおこなっている行為を改めて知り、日本で人身売買がどれだけ受け止められているかを感じざるを得ませんでした。先進国が、お金を武器に他国の子どもの人権を奪うということは絶対にあってはならないことで、もっとほかにもやるべき役割があるのではないのでしょうか? 多くの人に関心を持ってもらうためにも、みんなでこの問題を伝えていかなければならないと思いました。内田 沙希

日本のぼくたちは結構裕福なのでそのことを頭において生活しようと思います。またぼくたちが将来おとなになった時、人身売買をしないことがぼくたちにできる最大のことでと思います。丸竹 拓也

参加者は最後に、人型に切りぬかれた画用紙に、自分の似顔絵と自分がこれからやりたいことやメッセージを手紙にして書きました。それを大きな模造紙に手をつないでいるようにはっていました。

現場で働く人から直接お話をうかがえたことは貴重な体験でした。自分が、ある程度、距離をもって「人身売買」について考えていることに気付かされたように思います。どこか他人事という感じがぬぐい去れていなかったということです。ハンさんは「腹立たい」とか「悲しい」といった感情を表す言葉を使われませんでした。感情を飛び越えて、事実を知ってほしいという気持ちが伝わってきました。今、私は自分の身体を売り物にしなければならぬ、させられている子ども達がいることを本当に悲しく思います。そして、子どもでお金もうけをするおとなのずるがしこさも悲しく思うのです。ワークショップで見たこと、聞いたことを、自分の内に留めず、周りの人に発信することを、ある種の使命だと思って、行動していきたいと思えます。藤田 温乃

どのグループの発表を聞いても「子どもの人身売買」は絶対にいけないことだと強く思いました。子どもの人身売買をなくすためにどうしたらよいか話し合いましたが、ほとんどの人が、厳しい法律を作ってやめさせるのがよいという意見でした。私も法律を作ることは大切だと思いますが、それだけではなくおとなが働くことができるような仕事をたくさん作ることが必要だと思います。おとなが働いて給料をもらえれば、子ども達にご飯をたべさせることができるようになります。そうすれば子ども達は安心して学校へ行けるようになると思います。マーシー・ローズリン・萌実

初対面の人たちと話し合ったりするのは初めてで緊張しましたが、よい経験になりました。一番心に残ったのはわたしたちと年代の子が人身売買の犠牲になっていたこと。同じ命としてこの世に生まれてきたのに、毎日毎日生きるために体を売り、好きでもないことをさせられ苦しんでいる子どもがたくさんいます。わたしはこの現状をより多くの人に伝えたい。多くの人の心に訴えたいです。子どものことを真剣に考えて下さい。子どもの権利を守り、同じ人間だと理解して下さい。やめて下さい、人身売買。神谷 芽里

子ども達は、自分は生きる権利があるんだ、ということをおとなに訴えないといけないなと思いました。人身売買の問題に直接働きかけたりすることはできないかもしれないけれど、今、自分にできることをどんどん実践していきたいと考えています。須賀 知佐子



REPORT & INFORMATION

報告とお知らせ

お問い合わせもうしこみは

ユニセフ子どもネット事務局

(日本ユニセフ協会 広報室内)

住所: 〒108-8607
東京都港区高輪4-6-12

でんわ: 03-5789-2016

ファックス: 03-5789-2036

電子メール: jcuinfo@unicef.or.jp

お知らせ Information

署名活動

「子どもの人身売買」の根絶をうったえる 署名キャンペーンがはじまりました

現在、世界では、毎年120万人の子どものたちが人身売買の犠牲となっています。日本にも、フィリピン、タイ、コロンビアなどの国々から人身売買の犠牲となった子どもたちが送られてきているといわれています。

しかし、日本では、「子どもの人身売買」を取りしめるための法律がまだありません。そのために、日本政府が昨年5月10日に署名した「子どもの売買、子ども売買春および子どもポルノグラフィに関する『子どもの権利条約』の選択議定書」の批准(国が条約の内容に最終的に同意すること)ができませんままになっています。

日本ユニセフ協会は、日本がこの選択議定書を早く批准し、必要な法律の整備を急いでおこなうように国会に求めていきたいと考えています。今回の署名活動もそのためのものです。

署名の期限は6月末までです。署名用紙がほしい人は、ユニセフ子どもネット事務局までご連絡ください。また、ホームページでもダウンロードできます。(http://www.unicef.or.jp)



セミナー

日本ユニセフ協会大使 アグネス・チャンさん 大使就任5周年記念連続セミナー

1998年4月に日本ユニセフ協会大使に就任したアグネス・チャンさんが、就任から5周年にあたる今年、これまで訪問したタイ、スーダン、ティモール、フィリピン、カンボジアでの体験や、日本国内で参加したユニセフ支援活動の思い出、日本の子どもたちに期待することなどを話す6日間連続のセミナーがひらかれます。関心のある人や参加したい人は、子どもネット事務局までご連絡ください。1日だけの参加でも大丈夫です。

日時	各日のテーマとゲスト
2003年 4月21日(月) - 25日(金) 午後6時30分 - 8時30分	21日 私とボランティア: 香港から日本、カナダへ ゲスト: 亀淵昭信 ((株)エフオン放送代表取締役社長)
4月26日(土) 午後2時 - 4時	22日 アフリカの思い出(エチオピア、スーダン) ゲスト: アリス・ウォーカー(作家)(同時通訳付き)
ユニセフハウス 1階ホール	23日 アジアの子どもたち(仮題) ゲスト: 新井満(作家)
入場料 無料	24日 日本でのユニセフ活動と子どもの商業的性的搾取 ゲスト: 東郷良尚 ((財)日本ユニセフ協会専務理事)
	25日 子どもにふさわしい世界を作るためには ゲスト: 安倍晋三(衆議院議員)
	26日 日本の子どもたちに期待すること ゲスト: 毛利衛(日本科学未来館館長)(予定)

更新

2003年度のユニセフ子どもネット更新をおねがいします

今回のニュースレターには、2003年度のユニセフ子どもネットの更新のご案内が同封されています。更新作業がスムーズにいくように、4月22日(火)までに更新の手つづきをしてください。2003年度もさまざまな活動をみなさんと一緒におこなっていきたくと思います。どうぞよろしくお願ひします。

新しい資料のご紹介

『2003年世界子供白書』(日本語版)

2~3ページでもご紹介している通り、今年度の白書のテーマは「子ども参加」です。各国で活動をしている子どもたちの事例などが紹介されています。ご希望のネットワークには、1部まで無料で差しあげます。



『世界子供白書2003』7分ビデオ

キューバの幼児教育プログラムやタイの子ども参加を導入した学校教育、アルバニアで10代の子どもたちが作ったテレビ番組など、子ども参加をうながすためのプログラムの事例が報告されています。



©UNICEF/HQ97-0245/Horner

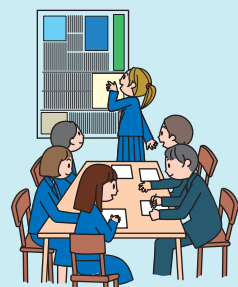
『2003年世界子供白書』とビデオの貸し出しの申し込みは、ユニセフ子どもネット事務局まで。

報告 Report

アジアの子どもの商業的性的搾取について学校で発表しました

昨年11月11日と18日に学校の授業の一環として、子どもの商業的性的搾取に関する発表をおこなった。タイ、フィリピン、カンボジア、ネパール各国の状況、子どもが東南アジアでどのように人身売買されているか、子どもたちのこの問題に対するとりくみなどについて調べたことを、日本との関連も含めて発表した。合計で約1時間、手作りのプリントとユニセフから貸していただいたビデオを使った発表に、クラスメイトの反応はさまざまだったが、ビデオに登場する子どもたちの発言や保護者が子どもを売っていることなどが衝撃的であった。発表前には、この問題について知らないというクラスメイトがほとんどで、知っていると答えた人は40人中5人だった。

被害者ではない私が発表することに戸惑いもあった。しかし、発表の1カ月前に、学校でタイで買春被害者の女性を助ける組織の方のお話を聞くチャンスがあり、私達にできることの一つとして“CREATE AWARENESS(意識を生み出すこと)”ということを挙げられていた。私の発表に興味を持ってきてくれたクラスメイトもいて、私はこの発表で、“CREATE AWARENESS”の機会を少しでも生かすことができ良かったと思う。大鳥 由香子(17歳)



ユニセフ子どもネット@関西

ネットワークがハンド・イン・ハンド募金活動をおこないました

学習会の時の話し合いで、ハンド・イン・ハンドに参加しようと決めた関西地域のネットワークが、1月4日(土)午前10時~午後3時まで、神戸市内で街頭募金活動をおこないました。中心となったネットワークたちが、友達などにも呼びかけて、合計17人の中学・高校生が参加し、124,555円もの募金が集まったそうです。

この冬一番と言われた寒さの中、高校生は各学校の制服で参加しました。主催者6名(うちネットワーク4名)以外にどれくらいの人々が参加してくれるのか、事前説明会に参加していない初対面の人々がなじめるか、初めは不安もありましたが、みんなで仲良く協力してできたと思います。岩島 史(17歳)

ユニセフ子どもネットニュースNO.3を読んで

ネットワークからの感想

学校に行きたくても行けなかったりして、かわいそうでした。私は学校に行きたくないときがあるけれど、アフリカなどの人々には、それはぜいたくだと思うような気がします。お金がなくて、生活の苦しい人びとの支援がもっと必要なのを知りました。遠山 優香 13歳

4ページに「世界の5人に1人は1日120円以下の生活」と書いてあり、すごく驚きました。それと、5ページの右にあるヨハネスブルクでの子ども達のスピーチで、政府と世界の人びとに対する要求がありましたが、本当に共感します。当たり前のようなことを守るのがすごくむずかしい。だから私たちネットワークや、そういう問題に理解のある人たちが先頭となり、良い社会、良い世界をつかっていかなければならないと思います。砂田 明日香 15歳

以前からアジアで人身売買がひどい状態になっていることは、ユニセフのホームページで知っていました。“小さい子どもならエイズにはかからないという考えを持ったおとなが、子どもの性を買ってまであそんでいる”というレポートをみてぞっとしました。また、最近では外国からその子どもの性を買ってまであそぶという事態もあるそうで、日本のおとなも多いそうです。このことは、日本人としてまた地球市民として絶対に許してはいけません。石田 有佳 16歳